

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原一夫 TEL06-6833-9227
 広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田茂夫 TEL072-850-5781
<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成19年8月(2007年) No.500

OMC会報500号の重み

会長 合原一夫

暑中お見舞い申し上げます。長い梅雨空もようやく晴れて本格的な夏がやって参りました。皆さんどうか暑さに負けず元気でこの夏を過ごしてください。さて、このOMCニュースもこの8月号で500号を迎えております。単純に計算しても年12回発行したとして42年ほどの年月を経ていることとなります。記録によれば昭和39年(1964)頃から手書きによるB4版の会報が小型映画友の会南支部の名で発行され始めたようです。私が故川畑健二会長に誘われて入会したのが万博後の1971年、この頃はハガキにタイプ印刷した会報でした。この頃は8ミリフィルム全盛時代でした。300号記念は故小倉宝蔵会長のときでB5版片面ワープロ打ちとなり、8ミリフィルムによる公開映写会で淀屋橋の朝日生命ホールにて観客250名の盛会だったと報じています。

小倉会長が亡くなられて私の就任挨拶が載ったのが平成7年(1995)12月号、360号です。引継いだときの会員数17名、年会費2万円でした。

会場は小倉会長の縁でホテルアウィーナでしたが経費節減の為、有村氏推せんにて阿倍野市民学習センターに移し、当時フィルムとビデオ併用だった例会をビデオ(S-VHS)に絞りました。会費も低く抑え会員増に力を入れてきました。400号記念号は平成11年(1999)4月、熊野古道撮影会募集の記事がありました。そして今回の500号記念、会員数40名を数え作品も15~18本が毎月出品されるという盛況です。これも時代の波とは言え、長年積み上げてきた実績、特に年1回より良い作品を公開映写会で一般の人に観てもらおうという一つの理念、映像仲間と打とけ合い作品づくりを楽しむというOMCの伝統をこの記念号で改めて思います。次の世代であろう600号記念号へと続いていくことを祈念してやみません。

8例会のお知らせ

8月例会は第4土曜25日18時から、難波市民学習センター(OCATビル4階)で行います。会場は冷房が効いていますので何か上に着るものが必要かも。月1回の楽しい集いにどうぞ。作品もよろしく。

垂井撮影会作品コンテスト

最優秀作品は関氏の頭上に

7月例会日の午後1時より同会場にて開催、撮影会参加21名中17本の作品が出品されました。当日出席の18名による、1人3票(順位をつけた)の持ち点にて投票した結果次の通りでした。

■最優秀賞

- ・ 曳山の声が響く (HDV) 16 票
関 剛さん 8分45秒

■優秀賞

- ・ 垂井・祭りの頃 (DV) 12 票
合原一夫さん 13分14秒

■秀作賞

- ・ 垂井曳山まつり (HDV) 9 票
前田茂夫さん 14分53秒

■佳作

- ・ 垂井曳山まつり (HDV) 8 票
進藤信男さん 14分58秒
- ・ 垂井曳やま祭りの印象 (HDV) 8 票
河合源七郎さん 10分05秒

■努力賞

- ・ 垂井曳山まつり (W) 紙本 勝さん 12分00秒
- ・ 垂井という町 (HDV) 安居利次さん 9分50秒
- ・ 子供歌舞伎は華やかに (DV) 有村 博さん 13分22秒
- ・ 祭りの日・垂井 (HDV) 江村一郎さん 7分40秒
- ・ 垂井曳山まつり (W) 増池 茂さん 13分14秒
- ・ 垂井曳山まつり (HDV) 宮崎紀代子さん 10分00秒
- ・ 垂井町曳山祭風景 (DV) 森 保信さん 7分08秒
- ・ 垂井曳山祭り (HDV) 森田光春さん 13分00秒
- ・ 垂井曳山祭 (HDV) 井上勝彦さん 8分56秒
- ・ 垂井曳山祭 (HDV) 奥 宏さん 10分56秒
- ・ 垂井曳山祭 (W) 鉄具嘉夫さん 10分00秒
- ・ 垂井曳山祭 (HDV)

錦 務さん 11分09秒

■出席者、井上、江村、岡本、奥、河合、紙本、合原、関、錦、鉄具、華岡、前田、増池、宮崎、森、森田、安居、吉岡(敬称略)。

■総合講評

同じ対象を同じ日に撮影しても、出来上がった作品がそれぞれ違い、作者の個性が表れるのを直に感じるのがコンテストの面白さで、お互い良い経験になったのではないかと思います。今回は子供歌舞伎がメインでしたが、歌舞伎のストーリーにどれだけ深く突っ込むかで、一般向けの作品の質と作品の時間が問われたような気がします。単なる記録としての映像であれば、1時間でも2時間でもじっくりと記録する必要があります。今回は一般向けの作品ですから、子供たちが一生懸命に伝統芸能に取り組んでいる、というひた向きな姿勢がどれだけ伝わるかが、評価の分かれ目だったように思います。そしてこの伝統をはぐくんできた昔の中山道宿場町としての背景がからんでいると判り易くなります。こういう点から皆さんの作品どれもよく纏められており感心しました。関さんの「曳山の声が響く」は、関さんらしく映像、特に音声に感性が行きとどき最優秀賞に選ばれました。皆さんの努力作品の数々に敬意を評します。有難うございました。(合原)

OMC映像フェスティバル

10月7日(日曜)と決定

このほど大阪市立中央会館に会場申込み森世話役に行き、予定通り10月第1日曜日7日に会場が確保できました。これからプログラム編成に着手します。

■大阪アマチュア映像祭

11月4日(日)中央図書館にて開催

■東大阪映像フェスティバル2007

9月2日(日)13時より布施駅前通り
リージョンセンター夢広場にて開催

全国コン受賞のお知らせ

■第41回東京アマチュア映像祭コンテスト
入選 Flying high 西村光雄
おめでとうございます。

7月例会のレポート

7月例会は28日土曜日、13時から撮影会作品公開審査に引続き、18時より同じ会場の難波市民学習センターにて開催、会場は冷房がよく効いていて薄着の人はぶるぶるふるえていました。今月の司会は午後の部からずっと吉岡氏が務められ、まことにご苦労様でした。書記は関氏、デッキ係は河合、江村、増池のフルメンバー、受付兼照明係は宮崎さんと進藤氏の担当で会を進行しました。今年初めて田中正文さんがひょっこり例会にお顔を見せられ、お元気そうなので安心いたしました。作品上映の方は9時10分までの長丁場で、昼から参加の方は34本の作品上映でいささかお疲れの様子でした。

■出席者：石垣、井上、江村、岡本、奥、上総、紙本、河合、黒田、合原、進藤、関、田中、鉄具、錦、西村、華岡、藤原、前田、増池、宮崎、森、森下、森田、安居、山本、吉岡、天草（敬称略） 以上28名

■上映作品（今月の講評は関世話役です）

1. 旧き良き街

増池 茂さん 5分00秒

大正から昭和初期の心齋橋筋商店街にタイムスリップ。と言ってもそこは再生したそごう心齋橋店11・12階の模擬店舗でした。横書き看板の漢字はすべて右から読み、レトロ感覚の文字が並びます。普通ならデパート内は撮影禁止のはず。ところが作者は二の腕でカメラを脇の下に挟み、液晶やファインダー見ずに、およその見当で撮ったのだそうです。それにしてもブレもなく良く撮れていました。三脚が使えない場所で手振れを防ぐひとつの方法かもしれません。

2. 山鹿灯籠（再作）

吉岡貞夫さん 10分00秒

熊本県北部の山鹿市は古くから賑わってきた温泉まちです。そして全国に知られているのが女性だけで踊る山鹿灯籠おどりで。作者はまず女性が頭に載せる「骨なし灯籠」の工房にカメラを持ち込みました。金銀に輝く灯籠は針金や木などは使わず、

すべて和紙で出来ていて、それもひとつひとつ手間のかかる手作り。見事な職人の技です。夕闇が迫る頃、揃いのゆかたで、頭に灯籠を戴いた女性たちがお祭り広場に現れ、よへほ節にあわせて優雅に舞い踊ります。圧巻は、やぐらを真ん中に、幾重にも輪になって踊る「千人おどり」。暗闇の中に千数百もの灯籠の明かりがゆらめく様はまさに幻想の世界です。

3. ふれあいまつり

石垣禎章さん 11分10秒

レーザー光線が飛び交い、打ち上げ花火が夜空を彩る花園中央公園の前夜祭から始まります。明けて、祭りのメインは盛大なパレード。近鉄の高架に沿った道路をプラスチックバンドはもちろん、趣向を凝らした様々な行列が通り過ぎて行きます。地方の踊りやサンバもあって国際色豊か。但し、この作品が9月の東大阪映像フェスティバルの“とり”になるとしたら、一部になぜか暗く冴えない色とピントの甘い場面のあるが気になります。

4. 菱垣廻船の復元

天草 稔さん 5分40秒

江戸時代、外洋を帆走できる運搬船として活躍した大型の木造船。舷側にある菱形の木組み文様からこの名が付いたと言われています。なにわの海の時空館の展示物として当時の姿をそのまま再現、堺の日立造船で建造されました。作者は関係者だったのか建造中のもようや、時空館の据え付け工事まで詳細に撮っておられます。ただ、今はここを訪れる人は土曜休日もまばら。その昔、大阪の発展に貢献した船を復元すると言う趣旨は判りますが、この事業で喜んだのは一握りの学者と一部業者だけ。船の建造費と海の中の特殊な展示館の建設費を考えたとき、殆ど関心のない一般市民は破綻寸前の自治体が強行した壮大な無駄遣いとしか映っていないと思います。

5. 再び蘇民祭（ワイド）

河合源七郎さん 10分10秒

岩手県水沢市の黒石寺。旧暦の1月7日に夜を徹して行なわれる蘇民祭は日本三大奇祭のひとつと言われる裸祭りです。日暮れとともに集まった男たちそれぞれが行灯を手にして寺へ向かい、厳寒の中を池に入

って頭から水をかぶります。午前0時頃になると高く積み上げた割り木の上に裸男が数人登り、そこに火が付けられますが、どれだけ耐えられるか我慢比べでしょうか。クライマックスは本堂前の蘇民袋争奪戦ですが、残念ながらその映像は有りませんでした。題名の「再び」は同じ題材の前作があり、そのときは雪深い中での厳しい取材だったと記憶しています。

6. 水郷佐原 (ワイド)

紙本 勝さん 8分40秒

利根川流域では潮来と並ぶ著名な水郷。しかも小江戸と呼ばれるほど古い家並みの残る町です。かつては水運による物資の集散地として栄えたところで、文化財級の建造物がいたるところにあり景観保存地区にもなっているそうです。自ら全国を歩いて測量をし、初めて日本地図を作った伊能忠敬の旧居も公開されています。作者はそれらを独特の視点で情緒豊に表現されていました。利根川の対岸は水生植物園。ここで作者は小舟にゆられながらの撮影。久しぶりにのんびりした余裕の内容でした。この数か月は忙しい作品が続いただけに、何かほっとした感じです。

7. 花の中で鳥と遊ぶ (HDV)

奥 宏さん 4分20秒

ポートアイランドの神戸花鳥園。広大な温室の中に様々な植物、魚類、鳥類を育てています。とくに放し飼いの熱帯種の鳥は人によく慣れ、休日の家族連れに人気があるようでした。作者が訪れた時は、ふくろうが人の腕に飛び移るショーの真っ最中。子供の腕にも乗っていたから多分安全なのでしょう。ところでこれ、モデルさんも出演してましたから、どこかの撮影会？

8. 般若はん (HDV)

宮崎紀代子さん 9分00秒

作者と同じ町内にある龍雲寺。新しい住民が増える中、途絶えていた「般若はん」の行事が復活したと言うお目出度いお話。人々の集う本堂でまず住職の説教があり、続いて僧侶たちがお経を唱えながら大般若経をアコーディオンのように広げて(所作名は判らないがこれで読んだことになるらしい)積み上げられた教典を消化していきます。法要が終ると堂内は楽しい集会所に早

変わり。和やかな光景が展開されます。この作品も、先のウエサカ祭りも、次の集会の場で地域の人々にに見せてあげたら喜ばれるのではないのでしょうか。

9. 認知症 (HDV)

安居利次さん 8分00秒

背景は住さんの太鼓橋。「物忘れが激しいんや…」と、自前の窯で焼きあげた陶器の猿と対話する作者。ところが拝見した作品は素材辞典とクロマキーを使った合成技術がますます上達。この作品のために新たに撮った箇所はそんなに多くはないと思われます。つまり既存の映像を巧みに流用し、あとはエフェクトテクニックが冴え渡る省エネ映像。認知症どころか、まさにパソコン編集の達人です。

10. 余部冬景色 (HDV)

前田茂夫さん 9分11秒

鉛色の空と日本海。雪で煙る余部の俯瞰がオープニングの効果を上げていました。垂直に降る雪がほとんど無風と言う状況を教えていますが、それでも岩に打ち上げる波しぶきは高く、冬の余部の厳しさを強く表していました。舟小屋の雪から落ちる雫に焦点をあて、鉄橋をoffに、構図にこだわった場面。列車の音が聞こえてきてそのまま通過させるか、と思いましたが、ピントを列車に合わせてしまっただけ残念です。そのあとのパンニングもいてだけません。やっぱり作者は鉄道マニア。鉄橋を通過するシーンが多いのは仕方がないのかも。

11. チョンマイで見聞き (HDV)

森田光春さん 10分00秒

早朝から街に出て托鉢で並ぶ若い僧侶。それが当然のように供物を配る女性たち。何事にも仏教が優先するお国柄、まず祈りから一日が始まります。チェンマイは日本に例えると京都のような古くから栄えた都会です。旧市街は2キロ四方の堀の内側。西にプラシン寺院、東にテイルアン寺院があり、さしずめ京都の西本願寺、東本願寺と言ったところでしょうか。そこに残る彫刻や壁画はたいへん貴重な物に違いありません。街を知るには市場で見聞きするのが最も身近な手段。作者も言っていました。チェンマイは知れば知るほど奥の深い街だと。

12. 神戸・トアロード魅力再発見(HDV)

井上勝彦さん 2分59秒

グーグルアースの立体地図がメリケン波止場の上空から北に向かって降りていきます。そこは旧居留地に続くお洒落な街。緑豊にガス燈が立つ遊歩道。ブランド品のウインドが並びフランス料理やイタリアンの店が軒を連ねます。静止画とスタビライザーによる滑らかな動きをうまく組合せた作者お得意の構成です。普段は何気なく通り過ぎる街でも少し視線を変えると、また新しい発見に出逢うと言うことです。

13. かげろい(改)(HDV)

関 剛 6分20秒

5月の例会での評者は、この種の映像を創る者の発想とはどこから来るのだろう。と言う意味の批評を書いておられました。この世界に踏み込んで50年以上になりますが、まだ自分でも“これで完成”と言えるものは一本も作れていません。ただ、えらそうなことを取って言わせてもらったら“8ミリ映画から続いている者には映像づくりの基礎から勉強してきた”ことでしょう。家庭のテレビが一人に一台の時代にビデオを始めた人は、その殆どがテレビの亜流になっています。プロが到底真似の出来ないアマチュアの世界が絶対にあるはず。そこが私の映像を考える原点です。

14. YOSAKOI 2006 (HDV)

江村一郎さん 8分00秒

近ごろは至る所でよさこいもどきをやっていますが。やっぱり本場は空気を感じまです違えますね。作者のアップ撮りはますます磨き加わってものすごい迫力。まあ、こんな映像を撮れる人は他には居ないでしょう。しかし、息もつがせぬ映像が8分も続くと、見る者の眼が追って行けなくなります。中盤のどこかに“なごみ”があれば良いと思うのですが。

15. 琉球村 (HDV)

上総修一郎さん 13分25秒

石垣島の観光施設でしょう。織物、砂糖絞り、沖縄民謡と生活の一部を紹介しています。機織りの女性の手元や足で紐を操るアップが構成として生きていました。誰にでも気軽に応じる民謡の師匠もまた、すば

らしいお人柄です。作者が取材した前日に、かつてから申請していた琉球村の有形・無形文化財が承認されたそうで、島民の明るい笑顔が印象的でした。

16. チベット鉄道 (HDV)

山本正夢さん 7分30秒

西寧20:28発ラサ行き。作者一行が乗ったのは軟臥車一室4人のコンパートメント。個人で切符を手に入れるのは大変と聞きました。昨年7月にラサまで開通した西藏鉄道は、日本でも時々テレビに出てきて、世界で最も高い所を走る列車として知られています。気圧が低いので酸素ボンベを置いているとか、飛行機のように気密式になった客車もあるらしいですが、車両間を通行する場合はどうなるのでしょうか。途中の停車駅でホームに降りてすれ違う列車を撮っておられましたが、息苦しくは無かったですでしょうか。西藏鉄道。とにかく知りたい事が山ほどある鉄道です。

17. 源氏まつり (HDV)

進藤信男さん 14分25秒

川西市の多田神社で毎年4月に行なう時代行列。多田は源氏発祥の地とされ、神社に祀られているには、清和天皇及び源満仲をはじめとする源氏一門です。多田神社にある源氏縁の物や行列を背景に清和源氏の系図、一族の名前と、それに纏わる因縁などが次々にテロップで流され、それにナレーションが被さり、14分を越える作品になったのは、これが原因。丁寧な説明のつもりが、かえって複雑で判りにくい結果になってしまいました。

カラーバー&カウントダウンマーク

について 前田茂夫

カラーバーを作品の直前に付けると公開映写会の長尺テープへコピーする際に、大変やりにくい、従って必ず黒リーダーを20秒程度つけて欲しいという提案がなされ、皆さんも納得されたと思います。

私は以前からカラーバー及びカウントダウンマークを作品の前につけるのは、如何なものかと考えていました。

まず、劇場映画の場合、カウントダウンマークを頼りに、スタートの場所を設定して映写機をスタンバイします。もう一台の

映写機のフィルムが終わる寸前に2台目の映写機をスタートさせ切り替えます。この作業を交互に行うことで長編映画も切れ目無く鑑賞できます。一方、TVの場合はデジタル映像ですから、制作局のVTRのクセによって微妙な発色の違いが有ります。東京のキー局が制作した番組をVTRで地方に配信する場合、色あわせのためにカラーバーを長めにいれて、地方局の調整技師が微妙なコントロールを行うためのものです。

従って、カラーバーもカウントダウンマークも決して視聴者に見せるものではありません。万が一、ミスって見せてしまったら、その技師は上司からこっぴどく叱責されるでしょう。しかし、アマチュアの月例会では、お構い無しに得意がって見せてきました。カラーバー等は「決して人様に見せるものではない」ということを認識して頂きたいと思います。

500号記念寄稿文集

500号記念に想う 関 剛

500を単純に月数にすると41年と8ヵ月。アマチュア映像界では最も歴史のあるクラブになる。よくもまあ続いてきたものだ。

数か月前、前田さんのHPに先々代会長、故・川畑健二氏のお嬢さんからのレスがあり「父が係わっていたOMCが今も盛大に活躍していることを知り、涙が出るほど感激しました」と書かれていた。なにげなく「川畑健二」とパソコンに打ち込んだらOMCのホームページがずらーっと出てきたらしい。

この種の会を統率運営するには、信頼される人格と積極的な行動力をそなえた人の牽引が無くてはならない。その点私たちは恵まれてきた。あらためて歴代会長に感謝し、お礼を申し上げたい。

考えてみれば私がこの世界に足を踏み入れたのはOMCの前身、小型映画友の会大阪南支部が発足して二年後ぐらい。もう50年にもなる。

OMCニュースが創刊されたのと同じ頃

の古い話で恐縮だが、まだ北浜に「三越」があって、その8階の三越劇場で、舞踊、音楽、芝居など、素人の発表会も行なわれていた。ある日、アマチュアの「3分間」と言う実験映画会が催され、現在は映画監督の大林宜彦や高林陽一もプログラムに名を連ねていた。大林氏の作品は霊柩車がカメラの前を超スローモーションで横切っていく3分の長〜いワンカット。やっとなの向こうに走り去ったら“きーえーたー”と間抜けた声が出てザ・エンド。

高林氏は比較的正統派で「走れ蒸気機関車」幹線から次第に消えていくSLにスポットをあて、それを3分で編集したもの。この作品の迫力に魅せられて、プロ・アマを問わずあちこちでSL映画が作られるきっかけになった。これは彼の代表作だ。

そのほか、原野を360度のパンニングだけとか、時計の秒針が3回転とか、芸術性の香りがする作品から、遊びか真剣なのか判らないものまで様々。一口に実験映画と言ってもそれぞれ作者の個性があり結構面白かった。

8ミリフィルム全盛時代はこの種のアングラ映像や、抽象、前衛、と言ったいわゆるアバンギャルドを創作するグループが各地にあり、学生や将来プロを目指す若者たちも多く参加していた。各地の小さなホールで頻繁に公開し、評価はどうであれ、こうした映像もひとつのジャンルとして市民権を得ていたと思う。

テレビは一家に一台から今や部屋ごとにある時代。その影響か最近のアマチュア映像はかつての独創的スタイルを失ってテレビの模倣が罷り通っている。プロはレポート番組ひとつ作るにも綿密な事前調査と出演交渉、それに多くの人員と費用をつぎ込む。アマチュアがいかに優秀な機材と技術をもってしても所詮まねごとにしかならない。私が危惧するのは若い人が入ってこない、入っても長続きしないこと。彼らの眼にはお年寄の道楽映像ぐらいにしか映っていないのではないか。いづれ消滅の運命にあるのは間違いない。

プロも成し得ないアマチュアの領域が必ずあると信じて、私はこれからも模索を続けるだろう。いまとなっては手遅れかもし

れないが。

OMCこの10年と私

安居利次

平成9年2月22日、私が始めてOMCに入会させてもらった日である。前の月、「ビデオサロン」や「ビデオキャパ」に合原会長がOMCの記事を始めて載せられた時期でもあった。1月、2月で7名の新入会員が入会した。みんな燃えていた。それから10年あまりの年月がすぎた。例会でのハイビジョン映写作品が大半を占める全国的に見ても最先端を走るビデオクラブになった。

OMCに入会する3年前、私は店をやめて、第2の人生を始めた。ビデオに興味を持っていた私は毎日が日曜日になるとすぐビデオの世界にはまっていた。亡き家内の後押しもあって、ビデオ作品を作ることが生きがいになった。作品を作るために、新聞やTVでネタ探しをした。見つけたネタを2人で撮影に行った。「このネタは私」「これは僕」と小さな争いをしたことも今では懐かしい。

始めはみんなアナログ編集であったが、しばらくすると「編集はパソコン」という空気が流れ始めていた。そのとき、藤原会員がパソコン編集の講習会を開いてくださった。それを契機にノンリニアの波は一気にひろまった。それとともに「音」や「作品構成」の研究会を開会員や合原会長が主催してくださり、OMC会員のレベル向上と親睦に大いに役立った。

ノンリニア編集に慣れてほっとしたときに、ハイビジョンの波が再び襲ってきた。前田会員がその鮮明な画像をみんなの前に紹介された。「ハイビジョンなんて、とても、とても」といっていた会員が徐々にHDVのテープを持ってくるようになった。これはOMCのクラブの雰囲気によるところが大きい。私自身、認知症の不安におのきながらハイビジョンの世界に足をふみ入れた一人である。「ビデオはハイビジョンより内容だ」という正当論を揺るがす怪しげな空気を持っていることは確かである。でも、OMCのこの雰囲気、得も知れない魅力でもある。

OMCに入会させていただいて十年、私には、いろいろなことがあった。ネタ探しで争った家内も先に逝った。そして一年後、その追悼映写会を開催していただいた。一人になっても生き続けられているのは、魅惑的なOMCのクラブがあってその一会員として親しく例会に出席させていただくのが生きがいになっているからだと思う。家内も天国から「OMCの皆さん、もうちょっと主人の面倒を見てやってください」とお願いしているように思う。

私の映像とのおつきあい、そしてOMC 進藤 信男

「King of Hobby」。これは、私が会社勤めをしながら細々と続けてきたアマチュア無線につけられたものであった。現役生活の後、多少なりとも余裕が出来ればマイクロバスにアンテナを付けて全国を気ままに旅をしたい。そのときに、テレビ電波(最近いわれている映像通信)が出せればいいなあ。こんなことから、映像に関心を持ち友人や家内に話したが話題にもしてくれなかった記憶があります。

「私にも、写せます」こんなコマーシャルによって、8mmカメラを買ったのは東京勤務時代、子供が生まれた翌年であった。このカメラを持って、よく出かけて写しては家族と楽しんだ。もちろん、無声映画である。この映像を子供の結婚式のときに映写しようとしたが、ビデオ以外の映写が出来ないといわれテレシネをやらせてもらえる先を探したのは平成8年(1996)になっていた。たしか、北摂・池田市の「サカエフォト」にお願いした。

古いスクラップブックを見返していると、「完 8 ミリ映画時代」というタイトルの新聞記事があった。(平成5年(1993)10月14日付日経新聞) 淀屋橋の朝日生命ホールで、8mmだけの最後の映写会が行われ、次回からはビデオも併行して上映するという内容でした。その月の22日金曜日18時から開始されたが、平日のため遅れて参加させていただいたように覚えている。その後、平成13年(2001年)合原会長のところへ入会したい旨電話をして例会を見学、そして入会させていただき、皆さんの

作品に魅せられ、早くあんな作品が作れるようになりたい。どんなことが必要なのか、何を狙いにすればよいのか、自分は何を表現したいのか、どうすれば映像に出来るのか、こんなことを思いながら毎月の例会を楽しみにしています。

映像は、観察力、想像力を養ってくれることも実感として会得できる。よき社会人であること、健全であること、親切であること、進歩的であること、国際的であることなど、アマチュア無線の世界でいわれているコードにも通じる場所があります。希望か夢のように考えていた、マイクロバス云々はなかなか実現できませんが、OMC会員の皆さんに暖かく受け入れていただき本当に感謝しています。

また、最近では野外のテーマを追っていますが、その土地の人たちに教えていただく、話を伺わせていただくなど人の輪も広がるのがビデオの世界であると感じています。

タイトルについて

上総修一郎

私はもともと絵が好きで子供のときから美術館通いが大好きです。今は隠居の身なので、国の内外を問わず機会があれば時間のやりくりまでして出掛ける。旅の交通機関を船にするようになってから有名美術館は殆ど訪ねたと思う。度々、通っているうちに絵を観に来る人びとは、団体さんは別にして、一定の癖があるのに気付いた。

その一 絵を観賞する前に、まずタイトルを書いた札をみる。絵の経歴が書いてあれば丹念に読んで徐に絵を観賞する。作者や経歴を思い浮かべて領いて次の絵に移る。仮にこのような観賞者を「静かな知性派」と名付ける。

その二 先ず絵を観る。作者を知っている人は、ちらっとタイトルを見て経歴を確かめる。で、次へ。仮に「冷静感覚派」とする。

その三 絵を、ぐっと睨む。うん、観たぞと移動。タイトル札はちらっと横目でみて次へ。これは「感覚派」としよう。

その四 ずず、ずいと観流して次の部屋へ。「話の種派」知人との話の種にしようと思って見ている。絵の観賞・は殆どしていない。タイトルは見ないと話の切りだしようがないからタイトルと図柄は結び付けて見ている。

さて、四つのパターンの中で真の美術愛好者はどのパターンの人だろうか。一と四は私は好きになれない。常識的と思うけれど、普通は二です。時間の余裕のない場合は止む得ず三パターンにする。優れた才能がない私は、そんなところか。

一・二・三・四・いずれもタイトルは大事な観察要素です。絵、字を描く。工芸品を造ってみる。美術品の制作を嗜む者はタイトルの決定に悩む。ピククリのタイトルが浮かんだときは嬉しいものです。例会で皆様の作品のタイトルが、これは佳いと噂になることは残念ながら少ない。プロテレビ局のドラマ制作担当者との雑談の中から・・・制作開始前のコンセプト再確認の会議で最後のタイトル決定の話になると、会議は沸騰。美学の一説まで飛び出したりするほど話題が付きにくいそうである。

もう一つタイトルについての裏話。江利チエミのヒット曲「テネシー・ワルツ」原曲の歌詞は恋人を友にとられたという暗い歌詞であるがチエミの明るいキャラクターとリズムのよい編曲、「テネシー・ワルツ」という明るい語呂のタイトルが相乗効果をつくって、大ヒットした。超有名になった美術品の作家が木箱を造ってタイトルや名前を描くと、なんと、この箱が美術品みたいに値打ちが出たりする。本来の作品を離れてタイトルに美が乗り移ったように愛好者が錯覚するのだろうか。骨董屋が値段をつけたりする。不思議な世になったと思う。美術品につけられた「タイトル」に威力ができた。そう考えて私達のつくるビデオのタイトルも精々ピククリの名タイトルを付けようじゃありませんか。

おわり